

地中海古代都市の研究 (117)  
メッセネのアスクレピオス神域の北プロピロン

## 9. 建築歴史・意匠 - 4. 西洋建築史

正会員 ○米岡太志<sup>3)</sup> 伊藤重剛<sup>1)</sup> 林田義伸<sup>2)</sup> 吉武隆一<sup>3)</sup>

ギリシア メッセネ アスクレピオス神域 プロピロン

## 1. はじめに

本稿は熊本大学ギリシア古代建築調査団(団長 伊藤重剛)がおこなった実測調査資料と他の事例を基に、メッセネのアスクレピオス神域にある北プロピロンの復元を試みるものである。プロピロンについては、カーペンターによって網羅的な研究<sup>1)</sup>がなされており、メッセネのアスクレピオス神域のストアについては、既に別稿で報告した<sup>2)</sup>。

## 2-1. 全体概要

古代メッセネ遺跡は、北にアクロポリスでもあるイトメ山、東にエヴァ山を持ち、市域は山裾の南北方向の緩斜面に広がっている。アスクレピオス神域はメッセネ市域のほぼ中央に位置し、北側のアゴラと隣接している。建設年代は紀元前 216/5 年頃と推定されている。神域は四方をストアに囲まれ、更にはその周囲を附属施設が取り囲んでおり、北ストアの北側にはセバステイオンと呼ばれる東西に長い施設がある。本稿で取り上げる北プロピロンは、アゴラの街路から神域に至るための重要な入口であり、セバステイオンと一体となってその中央に造られている。(図1)

街路と北ストアの床面には高低差があり、アゴラから神域へは、内部に備えられた階段を下ってアクセスできるようになっている。内部は北側のポーチ部分と南側の階段部分に大きく分けられ、二つの部分の間には、中央と両脇で大きさの異なる計3枚の敷居が一列に置かれている。オランダスの発掘報告<sup>3)</sup>によると、東側の敷居は南側階段室の円柱とアンタの間に床面から高い位置に発見されており、このプロピロン全体が、後の時代に随分改変されたようである。

## 2-2. 北ポーチ部分

北ポーチ部分は上部が全て破壊されており、現在は床面を支えるポロス(多孔質の石灰岩)による基礎部分が剥き出しになっている。遺構の残存状況はよくなく、上部を構成していたような残存部材も殆どない。さらにプロピロンの先端部の上には、紀元後4世紀とされるストアが床面の55cmの位置に作られており、そのスタイロバートの存在がこのプロピロンの先端部分を分かりにくくしている。ポーチ内部には、セバステイオンの北側壁面と同じ線上に後の壁が付加されている。

ポロスによる床の基礎部分を取り囲むように、床面

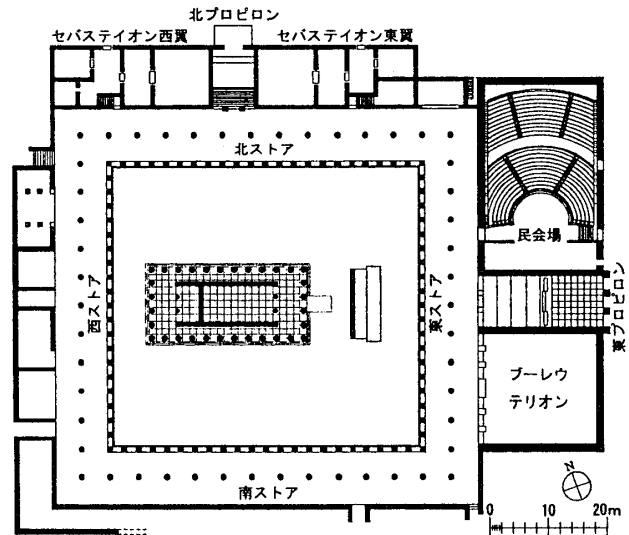


図1 アスクレピオス神域平面図



図2 南(神域側)より眺める



図3 階段部分

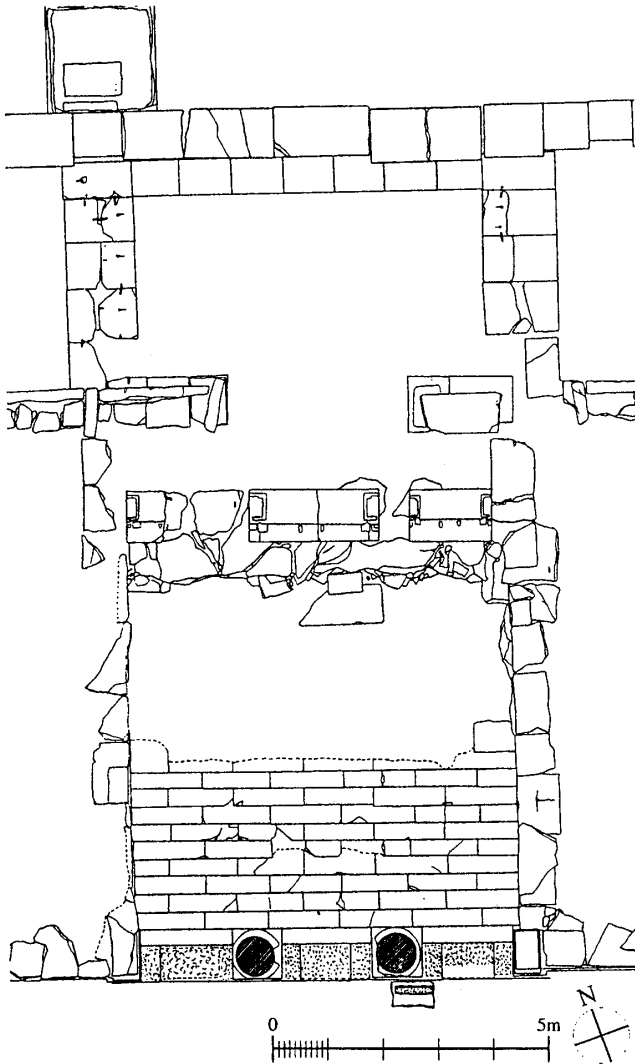


図4 現状平面図

レベルの部材が北側、東側、西側にそれぞれ一列残っている。これらの部材の幅は北側で0.64m、東側で1.280m、西側で1.285mであった。北側の部材の上面には何の痕跡も見られなかった。東と西の部材には鋸、ダボ穴、テコ穴の痕跡があり、この上に乗るトイコベートの設置線も部分的に確認できるものの、トイコベートの先端部分、つまりアンタの痕跡は明確でない。トイコベート下部の部材の観察と寸法の分析から、北側ポーチはトイコベートの内法で、6.394mであった。また敷居から現存の北側床石部材の北側縁まで6.000mであった。

### 2-3. 敷居

三つの入口の痕跡は、残存する敷居から確認される。大きな敷居部材の左右両脇に、小さな敷居部材が並べられており、いずれの敷居部材も石灰岩の一枚岩からなり、立枠の痕跡、軸受けの窪み、門の穴が見られる。敷居の下の基礎は、北側のポーチと違って石灰岩が用いられている。西側の敷居の半分は破損して失われている。全体寸法は、中央の敷居で0.97m × 2.36m 東

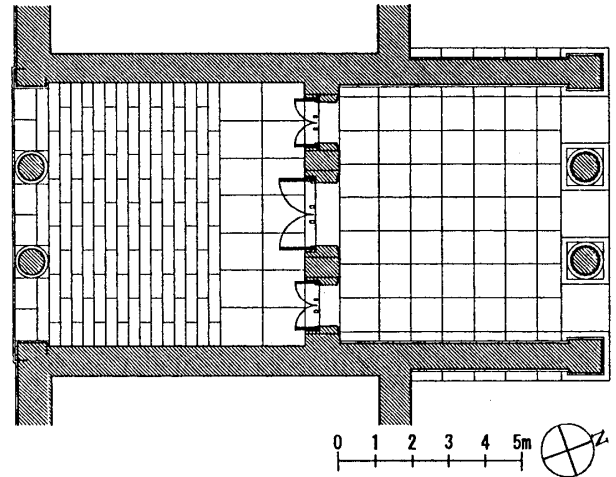


図5 推定復元平面図

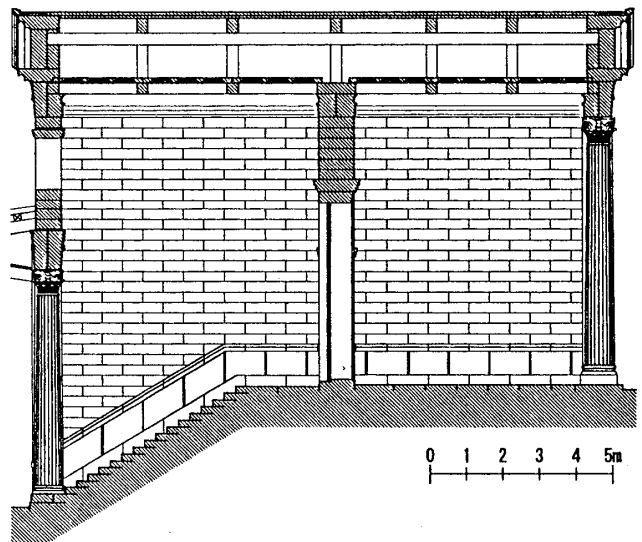


図6 推定復元南北断面図

側の敷居で1.52m × 0.96m、軸受け真々距離は、中央の敷居で1.875m、東側は1.225mであった。

### 2-3. 南階段部分

入口部分から南側は建物の内法幅7.110mと同じ幅をもつ階段で、現在は下の11段がほぼ完全な形で残っており、垂直の継ぎ目は深目地になっている。階段の最下段の部分には円柱が2本立っており、この円柱はドラム2個分で現在も高さ約1.7m程度の高さまで残っている。円柱はポロスで出来ており、直径は0.698m、2本の柱の真々柱間は2.559m、フルーティングは20本、現存する部分は全て胡麻殻フルートになっている。円柱の両側の出隅部分には、やはりポロスで作られたアンタの角柱が配置されている。大きさは正面0.420m、側面0.708mで、円柱と同様にアッティカ式の礎盤を持っており、円柱との真々柱間は2.410mである。また、円柱ともに階段の最下段の高さと同じプリンスの上に載せられている。角柱はスタッコで表面が仕上げられており、東側の角柱には厚さ5mm、西側の角柱には

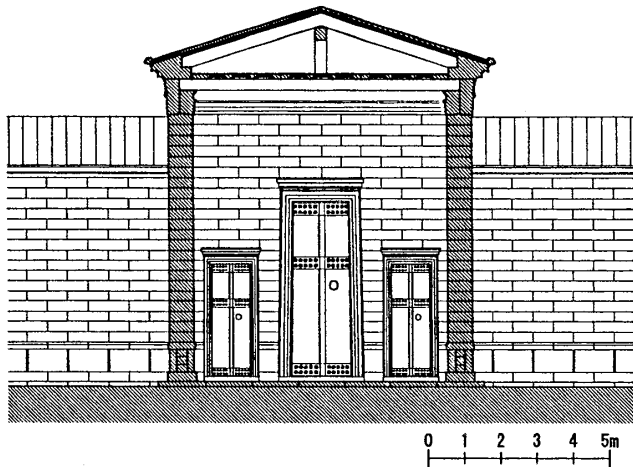


図7 推定復元東西断面図

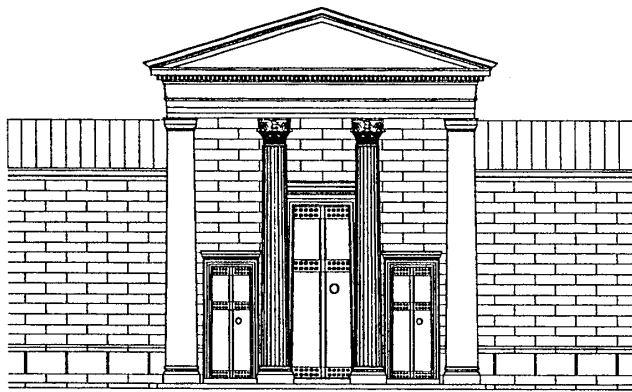


図8 推定復元北立面図

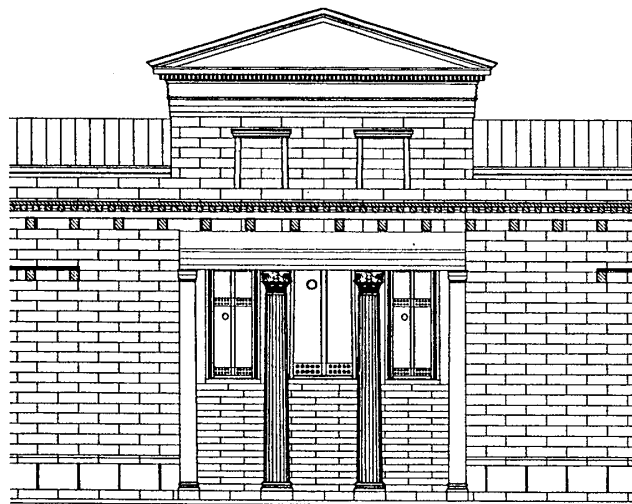


図9 推定復元南立面図

18mmのスタッコが残っている。本施設の部材と思われる柱頭が残っており、下部直径は0.555mで、高さは0.641mで、ストアのものとは異なる形状をしている。

### 3-1. 北ポーチ平面の復元

北ポーチ内部にある壁は、後の改変でセバステイオンの北側壁がそのまま延長されたい。というのは、オルソスタット部材の高さが北側壁のオルソスタット

とは異なっており、また両側2つの入口の前を塞ぐようにしている点から、明らかにこの突出した壁は後の付加であると思われる。したがって、ポーチの円柱の間を入ると、正面にドアのついた三つの入口が並んで作られていたと考えられる。

他の事例から前ポーチの形態には幾つかの可能性を考えることができるが<sup>4)</sup>、本施設では、東西両端の舗石にトイコベートの乗った痕跡が見られるため、インアンティス形式、若しくは前柱式が用いられていたものと思われる。

もし側壁が北隅部材の上で止まっていた場合について、インアンティス形式と前柱式のそれぞれについて検討をおこなう。インアンティス形式であったと考えると、北側に現存する7つの床部材（つまりスタイロベートということになる）の上に円柱が2本配置されたと考えられるが、この床石の上に円柱を配置した痕は全くない。しかも両側のアンタの間の7つの床石は、そこに2つの円柱を配するには都合が悪い。前柱式であったと考えると、おそらく四柱式のファサードとなり、アンタとの間には1柱間分をおいて、その先に円柱が立っていたものと思われる。もしこれが正しいとすれば、プロピロンの先端部は、現存する7枚の床石の北側にもう一列床石を敷き、その外側にスタイロベートを配置したと思われるが、調査の結果1柱間分先には柱が建っていたと思われる痕跡は見られなかった。

以上の検討より、側壁は北隅部材より更に先まであったとする事が出来る。前柱式の可能性も多分に考えられ精査が必要であるが、本稿では現存する7枚の床石の北側に、東西の列と同幅の床石をもう一列敷き、その列にアンタと柱が置かれていたものとして、ディスタイル・イン・アンティス形式で復元をおこなった<sup>5)</sup>。この列は同じ大きさ7枚の石材から構成されているとし、東西からそれぞれ3個目の部材上に1m×1mのプリンスが載るとした。円柱下部直径は、南側の円柱下部直径とプリンスの比から0.8mとした。

### 3-2. 入り口の復元

軸受けや門の痕跡から、3つの扉はそれぞれ両開きであることが確認された。入り口の南北方向の配置は、現状に従い、東西方向の配置は、3つの入り口それぞれをポーチ前面の柱間中央とした。開口高さの証拠となる痕跡は見つからなかったので高さ寸法と上部窄まりは、セバステイオン西翼部階段室の入り口の比を参考とした。開口高さは、中央の入り口で5.211m、両脇の入り口で3.428mとなった。開口部の仕様は、サモトラケのテメノスのプロピロンを参考にした。

### 3-3. 階段の復元

残存する階段の最下段から10段目までの南北寸法と、高さ寸法がわかっており、これを段数で割ること

により、蹴上げは0.183m、踏面は0.313mであることができる。最下段踏面から敷居部材下部までの高さ寸法は2.841mなので、この結果階段は全部で16段あったことが導きだされる。またこれより、階段部分の南北寸法が求められ、結果的に、階段を登ったところには、奥行き2.3mほどの床面が入口の南側に作られていたと思われる。

### 3-4. 北面高さの復元

柱高さと、エンタブラチュア及びコーニス部材の高さ寸法は、ストアの列柱の円柱下部直径からの比に従って求めた。バッカー上に梁が架けられるものとし、その上に天井が張られていたとした。床から天井までの高さは、およそ8.3mとなり、中央入り口の開口高さとの比は1.6:1となり、ウィトルーウィウス<sup>6)</sup>の示す比例関係1.4:1と近い値になった。

### 3-5. 南面高さの復元

プロピロンの棟の高さが一定だとすると、南面で北ストアの屋根とに高さの違いが生じる。本稿ではこの部分は、窓付きの壁面だと考えた。

北ストアの屋根梁<sup>7)</sup>は、フリーズ上端に架けられていたものとし、柱頭上部高さをストアの天井梁上部に設定した。この場合柱高さは6.094mとなり、エンタブラチュア高さは1.052mとなった。柱の円柱下部直径を1としたときの円柱高さの比は、8.730となり、エンタブラチュア部材高さの比は1.507となった。ストア外部柱の円柱高さ比は8.847でエンタブラチュアの比は1.086であるので、このプロポーションと比べて柱はやや太く、エンタブラチュアの部材高さは随分大きいということになるが、さらにフリーズの上に北面の柱高さまで壁が乗ると考えれば、このことは構造上合理的である。

### 3-6. オーダーの復元

ストアのコリント式柱頭よりやや大きな柱頭が出土しており、これが南面の円柱の柱頭に使われていたと思われ、柱には、神域のストア内部柱のように、胡麻殻フルートがおよそ人身の高さまで施されていた<sup>8)</sup>ものと思われる。オーダー詳細の復元は、可能な限り現状に即したが、不明な部分はストアの仕様に従った。

メッセネのアスクレピオス神域の東プロピロンでは前後面で仕様が異なっており、後面はコリント式柱が用いられている一方、前面は四角の台座の上に細いイオニア式円柱が乗っている。北面のオーダーの決定に際して、慎重に検討しなければならないが、幾つかの事例において前後面のオーダーは一致して造られている<sup>9)</sup>ので、恐らく北プロピロンの北面には南面同様、コリント式オーダーが用いられていたものと考えられ

る。詳細は南面同様ストアに従った。

## 4. 類似するプロピロン

建物内部にレベル差を持つ例として、アテネのプロピラエア(437-432 B.C.)、アテネのプニクス(4c B.C. 後半)ペルガモンのデメテール神域(2c B.C. 初め)などが挙げられる。この内ペルガモンのデメテール神域のプロピロン<sup>10)</sup>は、ペルガメネ式の柱を持つ点で非常に特徴的であり、メッセネのプロピロンと比較して規模は小さいが、神域へ下るアクセス形式を持ち、入り口を挟んで前ポーチと階段部分に分かれている点で類似している。

## 5. まとめ

実測調査資料と他の事例を参考に北プロピロンの復元を試みたが、遺構の状態が悪く決定的な証拠を欠く部分も多い。このプロピロンの復元にあたり、今後プロピロンの時代的・地域的推移を把握する必要がある。また、隣接するセバステイオンや北ストアとの関係を考慮し、変更の過程を視野に入れながら慎重に考えてゆく必要がある。

## 注

- 1) J. R. Carpenter, "The Propylon in Greek and Hellenistic Architecture", Univ. Microfilms International, 1987
- 2) 吉武隆一他「ギリシア古代都市メッセネのアスクレピオス神域におけるストアの研究 オーダー及び小屋組の復元」日本建築学会計画系論文集 第585号、2004年11月、pp.207-212.
- 3) Orlandos A.K.; Practika 1957, p.163, fig.178.
- 4) プロピロン正面の形態には、アテネのアスクレピエイオンのようなインアンティス形式、アテネのポンペイオンのような前柱式が多く見られるが、他にエビダウロスのギムナシウム(3c B.C.)のように周翼式の前ポーチを持つ例、サモトラケのテメノス(ca. 340 B.C.)のように両翼付きの例も見られた。
- 5) 前後面ともディスタイル・イン・アンティスの例として、エギナのプロピロン(6c B.C. 初)、スニオンのポセイドン神域(ca.444-440. B.C.)、ラブランドのヒエロン(351-344 B.C.)、カラウリアのヘローン(3c B.C. 初)などが挙げられる。後面がディスタイル・イン・アンティスで正面が四柱の前柱式の例として、アテネのプーレウレリオン(4c B.C. 中)、ペルガモンのアテナ神域(197-159 B.C.)、ミレトスのプーレウレリオン(175-146 B.C.)、ミレトスのギムナシウム(2c B.C. 中)などが挙げられる。
- 6) 森田慶一訳「ウィトルーウィウス建築書」東海大学出版会、1979年9月28日、第4巻6章1 pp.103-104.
- 7) スストアの屋根は神域内部に向かって片流れで、梁は斜めに架けられており、天井は全体が内部円柱を中心に両流れに張られたと復元している。つまり外部円柱から内部円柱にかけての梁は斜めに架けられ、内部円柱から後壁にかけては二重に架けられ、上に傾斜する斜め梁と下に傾斜する斜め梁に別れていたとしている。吉武他、前掲書 pp.209-210. 参照
- 8) 吉武隆一他「A Survey of the Asklepieion in Messene」日本建築学会計画系論文集 第576号、2004年2月、pp.207-212.
- 9) コリント式が用いられている例として、サモトラケのプトレミーII(280-279 B.C. 以前)、ミレトスのプーレウレリオン(175-146 B.C.) エレウシスの小プロピロン(50 B.C.)、ペルガモンのアスクレピオス神域(138-161 A.D.)などが挙げられる。
- 10) Wilhelm Dörpfeld, "Die Arbeiten zu Pergamon 1908-1909", AM 35, 1910, pp.357-364.

1) 熊本大学助教授 工博  
2) 都城高等専門学校教授 工博  
3) 熊本大学大学院自然科学研究科

Assoc. Prof., Kumamoto University, Dr. Eng.  
Prof., Miyakonojo National College of Technology, Dr. Eng.  
Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University